

世界で最も古くから続いている舞台芸術の能は、古典的な日本の楽劇の形式です。その起源は 9 世紀頃に遡り、当時は猿楽と呼ばれる、軽業、寸劇、喜劇といったいくつかの舞台芸術の緩やかな集合に過ぎませんでした。14 世紀になってようやく現在の能の原型となりました。

能の舞台は会話、謡、舞踊、音楽による一体的な表現です。多くの演目は日本の古典文学に基づき、愛、裏切り、憧れ、孝行といった普遍的な人間の感情を中心に展開します。その基本的な構造においては、シテと呼ばれる主役が能面と凝った装束とを身にまとうことで人物を表現しています。またシテはしばしば団扇を持ち歩きます。物語に文脈を与える地謡が脇役を務め、4 人の演奏者（囃子）が 3 種の鼓と笛とを演奏します。能の興行では一般的に幕間に狂言（喜劇）が上演されます。

能に慣れない人には能は緩慢で単調な印象を与えるかもしれませんが、しかしそのミニマルで高度に様式化された動作は非常に優雅で洗練されています。動作と仕草から余分なものを剥ぎ取り、何度も訓練を重ねると、それらはより意味深くなり、その印象はより強く、一切がはるかに表現に富んだものになります。熟練のシテは観客を惹きつけ、自分の頭をほんの少し異なる方向へと傾けるだけでさまざまな感情を表すことができます。

能に関して、実際の上演そのもの以外にも称賛すべき点は多くあります。能面作りには豊かな芸術性が発揮されており、それらはすべて手作りで、ある世代から次の世代へと一座の代々の宝物として受け継がれています。また手の込んだ伝統の模様をあしらった豪華な装束も美しいものです。

能舞台には荘厳な松の木で飾られた背景以外に装飾は施されておりません。能が屋外で演じられていた過去を反映して、舞台には現在も屋根がつけられています。松は神々の木と広く見なされており、松という象徴によって能舞台が神聖な空間であることを表現しています。